

主 題：主に喜ばれる結婚観

聖書箇所：I コリント書 7章25－35節

私たちは人生において何度か大きな選択を迫られる時があります。その選択次第で、その後の人生が大きく変わっていく場合もあるでしょう。例えば、たとえば、進学先を決める時、就職先を決める時、大きな病気を治療する時、様々な選択があります。結婚もその内の一つでしょう。

☆大きな選択（判断）をくだす時の考え方について

一般的には、今日の箇所は結婚について教えられていると言われていています。確かに、ここの箇所は、コリント教会からの結婚に関する質問に対してパウロが回答しているところです。しかし、今日のテキストをよくご覧頂きますと、最後の部分以外は、必ずしも結婚についてだけ教えられているのではなく、私たちが物事を選択する時、何を見て、何を優先すべきなのか、といったことが教えられていることが分かります。今日、私たちは、物事を考える時、特に大きな選択を迫られる時、どのように考え、また、判断を下すべきなのかということについてみことばから学びたいと思います。それによって、今後、私たちが後になって、後悔したり、苦しんだりすることが少しでも減り、ますます神に喜ばれる選択ができるようになっていくことを願います。

I. 容易に環境を変えようとしない 25－28節

まず、私たちが何か大きな選択を下そうとする時、気を付けなければならないのは、簡単に環境を変えることで満足しようとしてはならないということです。事を急いで性急に進めていくのではなく、落ち着いて考え、その上で慎重に物事を進めていくことが大事なのです。もちろん、これは結婚に関しても言えることですが、それ以外の多くの選択にも当てはまることを皆さんはよくご存じです。しかし、「そんなことくらい分かりきっている。そんな簡単なこと…」と言いつつも、私たち人間はある時には事を急ぎ過ぎて失敗してしまうし、一時の感情に振り回されて、後になってからよく後悔してしまう者です。

●今の環境は、神様が与えてくださったものだから

まず、皆さんに考えて頂きたいのは、ここの箇所を、聖書的な知識のあまり無い人が読んだとき、聖書の教える結婚観に関してどのような印象を持つかということです。聖書は結婚に関してあまり積極的には考えていない（＝結婚を喜ばしいものとは考えていない）というような印象を持たれると思われませんか？というのは、27節に「妻に結ばれていないのなら、妻を得たいと思ってはいけません。」とあり、また28節には「たとえあなたが結婚したからといって、罪を犯すのではありません。たとえ処女が結婚したからといって、罪を犯すのではありません。ただ、それらの人々は、その身に苦難を招くでしょう。」、29節にも「今からは、妻のある者は、妻のない者のようにしていなさい。」とあるからです。しかし、まず私たちが覚えなければならないのは、聖書のどの箇所であっても、その前後の文脈や書かれた背景、その対象などを無視してはならないということです。そのことを私たちがおろそかにしてしまうと、聖書だけでなく、どのような書物も、また会話でさえも、バランスを欠いた、間違った理解を持ってしまいます。この手紙はコリントという、当時大変栄えた大都市に住んでいたクリスチャンたちに対して書かれました。コリントの町は繁栄してはいましたが、同時に様々な罪に溢れた町でもありました。特に、性的な罪が教会の中にもはびこっていました。すでに見たことですが、自分の父親の妻（つまり、義理の母親）を自分の妻にしている者がいた程です。もちろん、それは当時の社会でも受け入れられてはいませんでしたし、何より、聖書がはっきりと禁じている行為です（創世記2：24；レビ記18章；20：17など）。

パウロは、そのコリントの町をよく知っていました。彼は第2次伝道旅行の時、1年半もそこに滞在して伝道していたからです（使徒18：11）。また、パウロはコリント教会に起こっている問題もある程度聞いて知っていたので、その当時のコリント教会に最も相応しい助言をしているのです。ですから、ここの箇所だけを見て、聖書が結婚のことをどのように教えているのかを結論すべきではありません。私たちが、ここの箇所を読みながら注目すべきことは、パウロがここで、どのような原則（ルール）を用いて、そのようなアドバイスに至ったのかということです。アドバイスそのものは、その人たちが置かれている状況によって変わります。しかし、原則は変わりません。私たちは、それを見付け、実生活に適用していく必要があるのです。

前回、7章の前半で学んだことですが、パウロは「できるだけ、性急な判断（＝環境を変えること）をしないで、そのままの状態でいなさい」ということを勧めていました。何故、パウロは、そのような助

言をしたのでしょうか？それは、過去のことは誤っていたと気付いてももう変えることができないということもあるでしょうが、それだけではなく、それらは神のみこころであったからです。イザヤ書にこのようにあります。14：24-27「万軍の主は誓って仰せられた。「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの計ったとおりに成就する。：25 わたしはアッシリヤをわたしの国で打ち破り、わたしの山で踏みつける。アッシリヤのくびきは彼らの上から除かれ、その重荷は彼らの肩から除かれる。：26 これが、全地に対して立てられたはかりごと、これが、万国に対して伸ばされた御手。：27 万軍の主が立てられたことを、だれが破りえよう。御手が伸ばされた。だれがそれを引き戻しえよう。」。また、マタイ10：29では、イエスが「二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。」と教えてくださっています。それらは、すべて、神のみこころと関係があるのです。この地上で起こるすべてのことは神の許しがあつてのことなのです（ヨハネ6：65；エペソ1：11）。だから、私たちは過去のことをいろいろ思い煩ったり、そのことばかりを反省していても仕方ないのです。それらは、例え、誰かの悪意であったとしても、あなた自身の罪や過ちであったとしても、過去のことで、もう変えられないことであるだけでなく、神の許しのもとに起こったことなのです。大切なのは、今であり、今後どうしていくかということです。神のみこころで起こったことを、簡単に否定して、軽はずみに事を起こしてはならないのです。

●先のこととは分からないから

どのようなことが当時のコリント教会で起こっていたのでしょうか。25節をご覧ください。「処女のことについて、」とここに「処女」あるのは、未婚の女性（＝1度も結婚歴がない女性）のことです。恐らく、この当ても、男性以上に女性に対して「早く結婚した方が良いのでは？」というプレッシャーが強かったのでしょう。ですから、36節でも「もし、処女である自分の娘の婚期も過ぎようとしていて、そのままでは、娘に対しての扱い方が正しくないと思い…」とあるのです。パウロのこういったことばから、コリント教会の質問の内容が予想できます。恐らく、彼らはただ漠然と「結婚について教えて欲しい」というように質問したのではなく、未婚の女性が結婚せずにいることについて悩み、そのことについて早く結婚させるべきかどうかという質問をしたと考えられます。34節で「独身の女性」と使い分けられているのは、恐らく、こちらは死別したか（＝やもめ）、既に離婚した女性のことであると思われます。25節「処女のことについて、私は主の命令を受けてはいません」というのは、12節でも同じような意味のことばがありました。「次に、そのほかの人々に言いますが、これを言うのは主ではなく、私です。信者の男子に信者でない妻があり、その妻がいっしょにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。」と、これは、ただ単に、直接「パウロがイエスからこの問題について教わった」とか、「福音書に書かれてある」とか、そういったことではないという意味であって、決して、私たちが軽く扱っても良いというようなことではありません。26節では「現在の危急のとき…」とありますし、29節には「時は縮まっています。今からは…」とあるように、当時のコリントには何か大変な問題が起こりつつありました。それは、今の私たちには、はっきりと断定はできませんが、当時のコリント教会の人たちには、ある程度、予測できていたことなのでしょう。そんな大変な危機が迫っている時だからと言って、「急いで結婚したり、また当然、離婚したりしてはいけない」ということを、パウロは言いたかったのです。実際、この十数年後に、ローマ帝国（ネロ皇帝）による歴史的な迫害が始まる訳ですし、パウロが救われる前にもクリスチャンたちに対する迫害は始まっていました。

26節で「男」と訳されていることばは「人」とも訳せることば（英語の man のようなことば）で、ここではどちらでも訳すことができます。現に、口語訳や新共同訳では「人」と訳されています。私も、ここでは「人」と訳した方が良いと思います。パウロはここで、男性だけに対して「そのままの状態にとどまるのがよい…」（26節）と教えているのではなく、もっと広い意味の、男性も女性も含んだ、コリント教会全体に対して「性急な判断を下すことがないように」という忠告をしているのです。多くの場合、そういった早まった判断は、後々、後悔や様々な問題を生むということをパウロは心配しているのです。私たちもあまりよく考えずに事を急いたり、周りのアドバイスを無視してしまったことで、後で反省したりすることはないでしょうか？パウロは、そのようなことが少しでもないように、アドバイスを与えているのです。こと、結婚という問題は感情的なことが先走ってしまうことが多いからです。

残念ながら、私たち人間は、明日何が起こるか知り得る術がありません。今日、当たり前なのが明日は違うかもしれないのです。だから、軽率な判断をするのではなく、しっかりと判断を下すべきです。もちろん、このパウロのアドバイス（＝今は結婚しない方が良い）は、当時のコリント教会に対して与えられたものです。しかし、今の私たちがこのアドバイスを通して適用すべきことは、「クリスチャンは結婚しない方が良い」ということではなくて、「いろいろな問題や困難があるからといって、簡単に環境を変えることで満足してしまわないのではなく、慎重に物事を考え、行動していく必要がある」ということではないでしょうか？なぜなら、28節に「…それらの人々（＝急いで、結婚した人々）は、そ

の身に苦難を招くでしょう。私はあなたがたを、そのようなめに会わせたくないのです。」と、パウロが心配しているように、余計な苦しみや、より多くの問題を抱えてしまうことにもなりかねないからです。私たちに必要なことは、いつもしっかりと周りの状況をよく見て、一つ一つの物事を慎重に考え行動していくことです。というのは、私たちの周りには、非聖書的な考えや価値観があまりにも多いからです。普段、私たちは意識していないかも知れませんが、本当にそういったものに影響を受けてしまっていることが多いのです。ですから、世の価値観の中で生活している私たちも、パウロがコリント教会の人たちに与えているアドバイスを心に留めるべきです。

II. 主に仕えることを最優先する 29-35節

そして第2番目に私たちがすべきことは、自分の周りの状況をよく見た上で、どうすることが、より主に仕えることができるのか、ということを考え、それを選択して行くことなのです。

●主に仕えて行くことこそが、私たちの生かされている目的だから

29節「兄弟たちよ。私は次のことを言いたいのです。時は縮まっています。今からは、妻のある者は、妻のない者のようにしていなさい。」と言って、パウロは、自分の言いたいことをより明確にして行きます。ただ、この「妻のある者は、妻のない者のようにしていなさい。」という勧めは、「妻のことを無視して、独身のよう^にに過ぎなさい」ということではないことは明らかです。なぜなら、そのことをパウロは、7章の前半で何度も禁じているからです。7：3-4「夫は自分の妻に対して義務を果たし、同様に妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。：4 妻は自分のからだに関する権利を持ってはおらず、それは夫のものです。同様に夫も自分のからだについての権利を持ってはおらず、それは妻のものです。」、10-13「次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。：11 —もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい。—また夫は妻を離別してはいけません。：12 次に、そのほかの人々に言いますが、これを言うのは主ではなく、私です。信者の男子に信者でない妻があり、その妻がいっしょにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。：13 また、信者でない夫を持つ女は、夫がいっしょにいることを承知しているばあいは、離婚してはいけません。」

では、パウロはここで何を言いたかったのでしょうか？パウロが最も言いたかったことは、35節「ですが、私がこう言っているのは、あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているのではありません。むしろあなたがたが秩序ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるためなのです。」とあるように、私たちがしっかりと秩序ある生活を送ることによって「主に仕えて行く」ということなのです。それが、私たちの益にもつながるのだとパウロは教えるのです。ですから、29節で言われている「妻のある者は、妻のない者のようにしていなさい。」というのは、「それによって、私たちにとって最も重要なことである、主に仕えていくということがおろそかにならないようにしなさい」ということなのです。そして、32-34節で「あなたがたが思い煩わないことを私は望んでいます。独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。33 しかし、結婚した男は、どうしたら妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、34 心が分かれるのです。独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうしたら夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。」とある通りです。

パウロはこの前の章、6章の終わりでこのように教えています。Iコリント6：19-20「19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」、これこそが私たちが救われた目的です。クリスチャンの皆さん、あなたのからだはもう既にあなた自身のものではなく神のものなのです。聖い神が住んでおられる神殿なのです。ですから、あなたは「自分のやりたいことをやって好き放題に生きていい」のではないのです。あなたは神に用いられるために救われ、神の栄光(=すばらしさ)を現わすための器として、生かされているのです。

そして、それは、まだ信仰を持っておられない方も同じです。あなたを含む、すべてのものは、神の栄光のために造られたのです。イザヤ43：7「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った」。ここで、あなたに対して「神様のために生きなさい」と教えられていないのは、あなたがまだ、あなたの造り主である神を信じ受け入れていないからです。ですから、まだイエスを自分の神として信じ、受け入れておられない方は、1日も早く、この神を信じられるようにお勧めします。それは、パウロのことばを借りるなら、Iコリント7：35「あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているのでは」ないのです。かつて、私は、「クリスチャンになったら束縛される…」と考えていました。しかし、今はそれが間違っていたことが分かりました。信仰を持ってから、私は本当の自由を得ることができました。目的なく、惰性で生きるのではなく、しっかりした基準を持って物事を考えることができ、クリスチャンになる以前よりも、様々な選択肢が浮かぶようになりました。なぜなら、かつては自分のことしか考えていなかったし、目先のものしか見

えなかったからです。クリスチャンこそ、本当の自由を知り、それを手にしているのです。そのことは、パウロはガラテヤ人への手紙5章で教えています。

●あなたが思い煩わないため

もし私たちにも「あの人は必ず結婚すべきだ」とか、「あの人は結婚すべきでない」というような思いがあるのなら、気を付ける必要があります。というのは、その人が本当に結婚すべきであるとか、ないとかということがどうして私たちが分かり得るのでしょうか。その人にはパウロと同じように「独身の賜物」が与えられているのかもしれませんが。私たちは神ではないが故に、個人々々の最善（神が一人ひとりに対して持つておられるご計画）は分からないのです。ですから、軽はずみな判断をするべきではないとパウロは言うのです。コリント教会が抱えていた問題…、それは教会の周りの環境が劣悪であったこともあるでしょうが、それ以上に、一つ一つのことに對して、深く考えることなく、簡単に先走った結論を出してしまったことにあるのではないしょうか。

ここで「心を配る」と訳されていることば（32-34節）は、「心配する」とも訳されることばですが、34節にもあるように「**心が分かれる**」という意味から来ていることばです。ここに、主（＝神）と配偶者との、そのどちらにも思いが注がれてしまって、本当に集中すべきものに集中できないことをパウロは心配しています。なぜなら、そういう時に「思い煩い」というものが起こるからです。皆さんもそのような経験がありませんか？思い煩いがある時というのは、決まって、何か信仰的に問題がある時ではないですか？熱心に神に仕えるべきなのに、それができていない時とか、みことばを知っているのに、それが実践できていない時とか、神の約束を疑ってしまっている時とか…。困難があるから、人は思い煩うのではないのです。もしそうなら、パウロは確実に思い煩っていたはずですが、なぜなら、彼は非常な困難の中にいたからです。けれども、ピリピ人への手紙にあるように、彼は獄中でも「**いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。**」（ピリピ4:4）と言っているのです。実際、彼はピリピの監獄でも、平安の中において賛美していたのです。使徒16:25「**真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。**」。ピリピ4:4には何とありますか？ただ「喜びなさい」ではありません。「**いつも主にあって喜びなさい**」でした。もし、人が神に喜ばれる状態で神に仕え、神に従っているなら、その人には思い煩いがないのです。ガラテヤ5:22-23にも「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。…」とある通りです。

私たちの周りにも「こんな大変な中でどうして喜んでいられるのだろう？」と思う人がいるかもしれませんが。もし、私たちがそのように思っているなら、私たちはこのように考えているのかもしれませんが。「環境が人を幸せにするのだ」と。だから、その人は環境を変えようと一生懸命になるのでしょうか。しかし、それは聖書の教えではありません。聖書が教えるのは、もしあなたが神を信じているのなら、しっかりと自分の務めを理解して、それを心から実践することです。そうする時に、あなたから心配や思い煩いがなくなるのです。

ここでパウロが最も強く願っていたのは、コリント教会の人たちが益々、主に仕えることができるようになることでした。だから、そのことからこの箇所は結婚のことに限定して教えているのでありません。確かに、コリント教会から尋ねてきた結婚に関する質問に対するパウロの答えですが、パウロがここで言いたかったことは、クリスチャンは結婚すべきかするべきでないかということではなく、私たちが何を考え、何を本当に優先すべきなのかということについて教えているのです。ですから、ここでの原則というのは、結婚に関してだけしか適用できないというのではなく、様々なものの考え方、様々な選択に適用して行くべきことです。私たちに与えられた最高の務めである責任とは何でしょうか？主イエスこそが私たちの救い主であり、本当の神であるという証をしていくことです。そのために必要なことは、まず私たちが、毎日、自分に与えられている環境を感謝し、その中で、ただ神に喜ばれること（＝奉仕）をしていくことです。

確かに、結婚は私たち人間に与えられた祝福であり大きな恵みです。また、私たちの人生における特に大きな選択の中の一つですが、決してこの神に仕える（＝奉仕する）という目的に勝るものであってはならないのです。私たちが結婚だけでなく、もし何か選択に迷った時は、それによって、本当に「神に仕える」ことができるのか、その障害とならないかどうかということ、私たちはしっかり吟味する必要があります。もし、私たちが間違った選択をするなら、それは私たちから益を奪い、その代わり、心配や思い煩いをもたらすことになってしまう、パウロはそのようなことが私たちに起こることのないように、ここで私たちに勧めているのです。それは私たちに対する神の教えでもあるからです。